令和５年度 大阪府立羽曳野支援学校 第３回 学校運営協議会

開催日時	令和６年３月１日（金）　１５：３０～１６：３０
開催場所	本校　図書室
出席者	井上委員、亀田委員、中條委員、前田委員
出席者	東野校長、岩田教頭、井川教頭、川野事務長、 和田首席、岡田首席、松山首席、宮地教諭、崎田教諭
傍聴者	なし
資　料	・学校運営協議会次第 ・学校教育自己診断アンケート資料 ・令和５年度　学校経営計画及び学校評価 ・令和６年度　学校経営計画について ・令和５年度　初任者研修資料
備　考	

議事等（次第順）
1　学校長挨拶 2　【協議】 ①学校教育自己診断について ②令和５年度　学校経営計画及び学校評価について ③令和６年度　学校経営計画について 3　【連絡報告事項】 ①初任者としての１年間を振り返って ②その他 4　閉会の挨拶
協議内容・連絡報告事項等
【協議】 ①学校教育自己診断について（宮地教諭） 児童生徒・教職員は web 回答、保護者・医療関係者は紙面で回答とした。 全体考察として、児童生徒対象の主要な項目である「学校に行くのが楽しい」「授業が分かり

やすい」の高評価が続いている。入院期間の短期化により、効率よく学習を進めようという教職員の意識の向上が反映されていると考えられる。

教員の評価が高く児童生徒の評価が高くない項目が複数見られる。指導する側の意識が強くても受動する側が「何を学んでいるのか」を明確に意識せずにいる可能性があると思われる。今後、各種の指導に際しては「何を何のために今学んでいるのか」をわかりやすく提示して指導に当たるべきというのが現段階の課題と判断される。

（委員）

・「学校へ行くのが楽しい」という項目に対して児童と保護者の結果は同じ傾向であるが医療関係者は少し低くなっている理由の分析について

→コロナ禍でなかなか医療関係者と連携がしづらくなったことや、病気の特性もあり学校へ行くことを楽しいとそもそも思っていない児童生徒を日常的に見ているという影響が考えられる。

・「学校に行くのが楽しい」と思えるような日ごろ行っている工夫を教えていただければ

→短期間の入院生が多い中でいかに関係を築くかが重要である。そのために子どもの興味のある話題について取り上げて共有することが多い。

→少人数であるがゆえ、授業の中で失敗しても再トライできる機会が多くある。そのため内容の濃い授業ができ主役となる機会が多い。

②令和５年度　学校経営計画及び学校評価について（校長）

評価指標に対して達成できなかった項目については「△」をつけている。

羽曳野支援の自己診断アンケートは今年初めて回答するという子どもや保護者が毎年たくさんいるため、経年変化の結果としては表れにくい。昨年の結果との差というものではなく、今年度の教職員の取り組みに対する結果の表われとしてとらえている。

「△」が多かったことについては、指標を学校教育自己診断の数字アップにしたが、こちらの工夫がダイレクトに伝わらなかったことが要因として考えられる。

③令和６年度　学校経営計画について（校長）

「目指す学校像」については文章を短くし、児童生徒を中心としたものとした。

「中期的目標」については『支援教育力の向上』という目標を『府立学校として、センター的機能の新たな発揮に取り組む』という目標に変更し、病弱支援学校として蓄積されたと知識や経験を地域に活かしていきたい。そのために①地域校で急増する不登校児童生徒に対して府立支援学校として、ASD などの発達障がいである可能性のある児童生徒に対する支援やアセスメント方法の研究や実践に取り組む②ICT 活用を通して校内授業及び原籍校復帰に向けた取り組みに、オンライン授業を積極的に取り入れ、センター的機能として、羽曳野支援に転籍しない児童生徒が在籍校とオンライン授業等でつながる環境づくりを支援していく。という目標を盛り込んだ。

・「目指す学校像」にある『児童生徒が、「強く、明るく、豊かに」毎日を過ごし～』という部分は素晴らしく、中期的目標もこの部分を見据えた修正となっている。

・学校教育自己診断での校長先生からの話をお聞きして、羽曳野支援学校の子どもたちのニ

ーズは短期勝負と考えられる。それを意識した教育や支援をしていかなければならないと思うが、そのためにはどういう研究をして実践につなげていくかが大切と思う。

・子どもたちにとって自信を持つこと、自己愛を培っていくためにも自分の将来像をイメージできることが大切である。羽曳野支援のように個別対応が組める体制であれば、自分の将来像をイメージできるような取り組みをされたら良いのではと思う。

・提示した内容で承認。

【連絡報告事項】

①初任者としての１年間を振り返って（崎田教諭）

今年度研究授業で行った社会科の授業について報告。

入院のため普段あまり外出できない生徒に向けて、Google earth のストリートビューを活用し、古都京都の街並みを身近に感じ、歴史的景観を守る取り組みについて理解を深めることができるよう工夫した。

→ICT を上手に活用し、子どもたちが興味を持てるよう工夫されていた。